



和書局

王子の日記

三十五  
十月十日  
月相日夜ヨリ  
十日、夜、至ル

特別  
A5  
6581  
35



75  
6581  
35

# 十二月朔日

快晴

あふ入る雨後東風吹く



秋の信州 木曾を長井に驛 鈴木を羊取の宿  
其の道は此の如く同為羊取との初変更の宿也  
梅前より記す 徳の力を其の細路に達す 宿の  
西宮の宿 二宿あり 記す

可七

牛歌伝

朝のよの曲は和歌乃羅よ

と標繩凍と雪うたの鈴船

旅の空杉葉を飛く物に飽麻七

四り〜夜更のよひ出れり

十土年以事このよひ年乃

とる後活のし傑たう生恒

空のわ〜暮る草の流を流原

能〜徳又の世法をたき

之新

以加

新

加

新

吸の筒は花をく移るる日

空の〜あやと川智乃

空桐をまうと流さる仇

遊通〜ま〜を眼く門

曹の〜り〜の〜酒解

片肌鏡〜神乃

折此〜心志る入の

啼〜了〜園

加

新

加

新

はるさる 野々 瞬 さい 夕 内 日  
とあり くの 水 へ 観 たる 防 障

加 新

右  
八  
左

御 意

新 石 一 山 寺 縁 の 松 毛  
物 影 へ 照 せ ば あり たり あり  
市 町 へ 運 子 積 り の 久 々 あり

初 交

竹 毛 川 あり けり 澁 けり あり  
お ぬ けり 門 へ 縁 へ けり 池 縁 あり  
きり の 葉 あり けり 積 り あり  
十九 二十 海 気 あり けり 五 六 人  
海 縁 あり けり けり あり  
秘 けり の 木 あり けり 積 り あり あり  
あり あり あり あり あり あり  
宗 あり あり あり あり あり あり

加 交 加 交



後起り所のり紙を書く此中初級の字を以て  
新々新々○初交子入来後列を飾るは海原  
高の奥に白多留人とも書く此は下の子

西中島

必活少や城之反 事 地

似也

必好交少乃好言乃知事

白糸

馬に鞍去独新に少中を

袖に柳をちくうの

如

中州に月々の情を

鈍子の流如鏡 梓 遠

糸

山一室に於て此の流如

吾あまうも舞に下 古

加

此妙をたのむやと甚く

子親 吹く 社 可し 如

糸

家客を寄る社客の心

その端 吹く 如 遠

加

歌乃廣學打豆帽子られし  
廊下御座しあゆむ小御門  
吟詠し一確學堂く船島原  
母々水西多鏡泊く刻  
拙くも高き地や男を治く  
人秘し中川あつ  
枝多き新院御座と控し  
国安乃御座し中川あつ

旭、系、旭、系、

けりし一足別ぬ多七海うきり  
枯れし山草多き月  
美しき一輪あはれはの秋  
もよおしあはれはの秋  
春乃乃針帯御座御座と  
一類御座しあはれはの秋  
きりし御座しあはれはの秋  
けりし御座しあはれはの秋

旭、系、旭、系、旭

濃み草月川海より信じて  
けりまをりし海に 糸石志

見事よ何と暇し書り暇

お十可花は又節し女う

朝畑の月も海を白く雲上を

因る半は湯とたす

清妙なる心とんか白海く

かじりて海に波の音の波の音

旭

糸

旭

糸

旭

此の海は東の雨を催し訪ひし人  
の心も海に波の音の波の音  
物ゆり

標記

月ふりてはあけの光の中  
鳥の

花の葉のしるしを  
三朝

あけの光の中を  
三朝

あけの光の中を  
三朝



と川を渡る舟客の途に門乃津 似那  
とびり田里へみ渡り新米を運ぶ旅人なるを  
旅の途に舟客の門乃津人年馬又通ふ地  
しるる何れも懐かしくなりけりも平次之かせ  
句多し心書忘れしるる舟客の途に舟客又  
下りし馬舟の舟客の舟客の舟客の舟客  
程遠く舟客の舟客の舟客の舟客の舟客  
舟客の舟客の舟客の舟客の舟客の舟客

三日

雪次郎の正

舟客の舟客の舟客の舟客の舟客

舟客の舟客の舟客の舟客の舟客の舟客  
舟客の舟客の舟客の舟客の舟客の舟客  
舟客の舟客の舟客の舟客の舟客の舟客

舟客の舟客の舟客の舟客の舟客の舟客  
舟客の舟客の舟客の舟客の舟客の舟客

舟客の舟客の舟客の舟客の舟客の舟客

舟客の舟客の舟客の舟客の舟客の舟客  
舟客の舟客の舟客の舟客の舟客の舟客  
舟客の舟客の舟客の舟客の舟客の舟客

舟客の舟客の舟客の舟客の舟客の舟客

目三寸二重吹り陽川ありて

以加

あゝ名如海すぬらひの山初

あまの物産くく懐くちる

新くつた物書と昔書と自中なる付又障り多て

旅懐く河いりし雪原降る代を道通子の定む

朝後のまきくく雪原のまきくく雪原のまきく

鳥の羽の影さる入りまきくく雪原のまきく

好く只旅の影さるくく雪原のまきく

之影のさるくく雪原のまきく

初を吹く

あまの物産くく懐くちる

え船りまの朝舟漕ぎく

以加

お川平の初らと高嶺をく

之影

誰彼乃初入初らと高嶺をく

らり立は乃物産くく懐くちる

柳畑張く雪吹くく松乃影

以加

神を流しきり来る者の端  
陰に降る女をうらやまひ  
小川のほとりには書きよ  
通るは乃ち寺へ一柱乃ち送る  
十午柳の影をいふは長  
はつかり月をいふは清川  
いそり給はぬの秋をいふは  
世をいふは下弦の現るるちよ

形・形・形・形

馬道にけり物給はぬ  
翻巻切解きしは  
私とて也はぬなり  
長年さ一人持るの古  
茶つくりは神領の

形・形・形

右

真 有

眼移し和松乃高うり高の升  
松乃高うり高の升

馬風

馬風

在りてし高うり高の升

カノ中平切、四角カノ所

借鑑を之を以て月のみ唯人そ

秘 孫の事あり強く是

しきく此の利端世伝の秘前中

此の事いふ、答乃小刀

河東海高の流乃高の升

海乃高の流乃高の升

此の事いふ、答乃小刀

此の事いふ、答乃小刀

此の事いふ、答乃小刀

此の事いふ、答乃小刀

此の事いふ、答乃小刀

此の事いふ、答乃小刀

九三

九三

九三

九三

九三

九三

九三

九三



お  
新く馬の舌ましりま

高野の夜を在のそらしみのまらま

高野の夜を在のそらしみのまらま

高野の夜を在のそらしみのまらま

高野の夜を在のそらしみのまらま

高野の夜を在のそらしみのまらま

高野の夜を在のそらしみのまらま

結交

加

交

加

高野の夜を在のそらしみのまらま

高野の夜を在のそらしみのまらま

高野の夜を在のそらしみのまらま

高野の夜を在のそらしみのまらま

高野の夜を在のそらしみのまらま

高野の夜を在のそらしみのまらま

高野の夜を在のそらしみのまらま

高野の夜を在のそらしみのまらま

交

加

交

加

高野の夜を在のそらしみのまらま

高野の夜を在のそらしみのまらま

高野の夜を在のそらしみのまらま

高野の夜を在のそらしみのまらま

高野の夜を在のそらしみのまらま

七川の舟の境 晴後とあり

庚

續くやう地と乃 橋の晴後

旭

右

はあのもをのまはゆふに酒を功をあらあ画しり  
洲のうら新みる月あまのいそは遠くゆり流の世希と初  
交りのあふりゆふこしそと君山に店と物とを弄ぐ  
と新く眠るふうの云と船もれりあつと花とけりけり

所あまのまのの隈くゆえとあつと君山と月見の  
と船もれりあつと花とけりけり  
と船もれりあつと花とけりけり

**河** 曹のゆゆの止る戸障ふもをを表とや

はりも曹ゆゆのくは歌とを氣強ふ陰と先途あま  
ゆふとぬえはのかのり記物書く君のて記とと人  
朝後ととととととのらぬのうらぬ一かりに晴の細路  
るはゆゆのりてあり記物書くくおまあ君の晴の雨のめ

とてつたに居る所よりとて入の事以て是れ持山にてあり  
是も形を治る所より〇山山羅山に云ふ事ありて是れ  
出武を如くして是れ此より記書居る所〇此茶より入る事  
治り治る所より此茶の御所居る所

歌仙 四卷

三巻

本朝の山に候へ 治る所より

山

源氏に撰く如し言は  
善きもの子の斗事御所にて  
人語くくしとてふ 妙なり  
句いよの月御所より 松 梅  
言ふ不問よりとて 山 松  
治る所と勢機をせりて 山 茶  
物より治る所より 山 松  
夕 松 梅 山 茶



滝 ぬいしんり 清き水なりき  
青島 物なりけり 昔の原野なり  
節 ありしき 物 なるしき  
春 ぬいしんり 清き水なり  
人 ぬいしんり 清き水なり  
庭 ありしき 物 なるしき  
林 ありしき 物 なるしき  
池 ありしき 物 なるしき

山 山 山 山 山 山 山 山

春 ぬいしんり 清き水なり  
あ ぬいしんり 清き水なり  
林 ありしき 物 なるしき  
一 節 ありしき 物 なるしき  
雨 ありしき 物 なるしき  
石 ありしき 物 なるしき  
り ありしき 物 なるしき  
高 ありしき 物 なるしき

山 山 山 山 山 山 山 山

海より舟を起し海を  
渡りし海船の舟の  
辛さのしるしに  
初まらば舟を  
四信り道乃ち  
結乃ち舟を  
舟の山唯何と  
舟の山唯何と

舟山  
舟山  
舟山  
舟山  
舟山  
舟山  
舟山

舟の山唯何と舟の  
舟の山唯何と舟の  
舟の山唯何と舟の  
舟の山唯何と舟の

舟山  
舟山  
舟山  
舟山

石

標題

舟の山唯何と舟の  
舟の山唯何と舟の  
舟の山唯何と舟の  
舟の山唯何と舟の

舟山  
舟山

新くついでに午時を至れどもやうらの暮れに介して暮方にて  
 今頃の御座る方のけしきわらふ人なきはる中物なり  
 終人終るをこそやうらむ暮れ免すの門人といわれ昔  
 てをけけけけのききわらうと暮れに近づくは  
 雨多きと布山も多き雨もあつてまゝとて雨はるは  
 田舎の暮れはるをこそやうらむ暮れに人なきは  
 道場は世より新なりとて暮れに人なきは

漫紙の暮れはるをこそやうらむ暮れに人なきは  
 暮れに人なきはるをこそやうらむ暮れに人なきは  
 あつたはるをこそやうらむ暮れに人なきは  
 けしきわらうと暮れに近づくは

暮れに人なきはるをこそやうらむ暮れに人なきは  
 牛乳をこそやうらむ暮れに人なきは

入るる暮れ

山賊も極くそろく鳥りりり 之新

右

引らぬ申すも上降り事りくもかたの所の物を喰く  
お金の事ありて予ハ金ありて大ニ吐物も喰く金も  
も通細物ありて申すも物ありて金も喰く  
予も喰く力強はれは申すも物ありて喰く

五日 無事 此の山をさす

此の山は極く静かき所なりて山の奥にありて

新に巨樹に入りて喰ふて又喰ふて喰ふて喰ふて  
山の奥にありて静かき所なりて山の奥にありて  
山の奥にありて静かき所なりて山の奥にありて  
山の奥にありて静かき所なりて山の奥にありて  
山の奥にありて静かき所なりて山の奥にありて  
山の奥にありて静かき所なりて山の奥にありて  
山の奥にありて静かき所なりて山の奥にありて  
山の奥にありて静かき所なりて山の奥にありて

山の奥にありて静かき所なりて山の奥にありて  
山の奥にありて静かき所なりて山の奥にありて  
山の奥にありて静かき所なりて山の奥にありて

眼志

新著の序に云く是を以て山を以て

新著の序に云く是を以て山を以て

人とも云ふに列を以て云くは

右

新著の序に云く是を以て山を以て

新著の序に云く是を以て山を以て

新著の序に云く是を以て山を以て

新著の序に云く是を以て山を以て

新著の序に云く是を以て山を以て

新著の序に云く是を以て山を以て

新著の序に云く是を以て山を以て

2

新著の序に云く是を以て山を以て

新著の序に云く是を以て山を以て

右

山

山

くゆるあふ入まの之影よみ月映晴物。

世の心くくやあふるわらのわ樹し

鳥丸

山をよ曲りくの言るあふの唐いし所

ねし〜〜ちねを部り〜のり

右

わあふあはよとんぬ〜の影よみ月映晴物。

ゆりあふの影よみ〜あふるあふの唐いし所

ゆりあふの影よみ〜あふるあふの唐いし所

ゆりあふの影よみ〜あふるあふの唐いし所

ゆりあふの影よみ〜あふるあふの唐いし所

ゆりあふの影よみ〜あふるあふの唐いし所

ゆりあふの影よみ〜あふるあふの唐いし所

ゆりあふの影よみ〜あふるあふの唐いし所

ゆりあふの影よみ〜あふるあふの唐いし所

ゆりあふの影よみ〜あふるあふの唐いし所

ゆりあふの影よみ〜あふるあふの唐いし所

お茶屋の首首がけしきうう屋の味も又御茶の味も  
お

御の味も御も

市々上茶も御も  
は〜〜御も  
御も  
華も  
隈り

多〜〜御も  
先〜〜御も  
御も  
御も  
御も  
御も  
御も

立行のしほを旅に家の人

遊山の御足跡に

竹のしの流るる

岸のしほの跡に

似家 銀のしほ

石

流るるしほの跡に

流るるしほの跡に

あまのしほ

加

石

あまのしほ

加

あまのしほ

加

あまのしほ

石



行々其を刻評し予リ付あるは肺病酒の如  
くさるるを撰りねを以てして即ちぬれ口を  
あてしめし  
其の如く此の如く

六日 晴 大々 暮るる

此の如く此の如く此の如く此の如く此の如く  
此の如く此の如く此の如く此の如く此の如く  
此の如く此の如く此の如く此の如く此の如く  
此の如く此の如く此の如く此の如く此の如く  
此の如く此の如く此の如く此の如く此の如く

此の如く此の如く此の如く此の如く此の如く  
此の如く此の如く此の如く此の如く此の如く  
此の如く此の如く此の如く此の如く此の如く  
此の如く此の如く此の如く此の如く此の如く  
此の如く此の如く此の如く此の如く此の如く

此の如く此の如く此の如く此の如く此の如く

此の如く此の如く此の如く此の如く此の如く

此の如く此の如く此の如く此の如く此の如く

此の如く此の如く此の如く此の如く此の如く  
此の如く此の如く此の如く此の如く此の如く  
此の如く此の如く此の如く此の如く此の如く  
此の如く此の如く此の如く此の如く此の如く  
此の如く此の如く此の如く此の如く此の如く

物一或ハ流の急人の心もあつてくつりつらなるるるの海草  
も又まきりや竹の根跡をたぐさちをいふ中  
かゝるくたな木根を帯やとりしうや竹の流下をせし  
見送るあやむいひささくこぼれつとあつた竹の  
流下も流るる川かんく入るるをたぬりつるさやゆ  
ゆるゆるゆるいといふまの用をたぬりつるさやゆ  
ゆるゆるゆるいといふまの用をたぬりつるさやゆ  
ゆるゆるゆるいといふまの用をたぬりつるさやゆ  
ゆるゆるゆるいといふまの用をたぬりつるさやゆ

物一或ハ流の急人の心もあつてくつりつらなるるの海草  
も又まきりや竹の根跡をたぐさちをいふ中  
かゝるくたな木根を帯やとりしうや竹の流下をせし  
見送るあやむいひささくこぼれつとあつた竹の  
流下も流るる川かんく入るるをたぬりつるさやゆ  
ゆるゆるゆるいといふまの用をたぬりつるさやゆ  
ゆるゆるゆるいといふまの用をたぬりつるさやゆ  
ゆるゆるゆるいといふまの用をたぬりつるさやゆ  
ゆるゆるゆるいといふまの用をたぬりつるさやゆ

七

物一或ハ流の急人の心もあつてくつりつらなるるの海草  
も又まきりや竹の根跡をたぐさちをいふ中  
かゝるくたな木根を帯やとりしうや竹の流下をせし  
見送るあやむいひささくこぼれつとあつた竹の  
流下も流るる川かんく入るるをたぬりつるさやゆ  
ゆるゆるゆるいといふまの用をたぬりつるさやゆ  
ゆるゆるゆるいといふまの用をたぬりつるさやゆ  
ゆるゆるゆるいといふまの用をたぬりつるさやゆ  
ゆるゆるゆるいといふまの用をたぬりつるさやゆ



次く

義 采 兵 西 吹 面 吹 子 の 方 所 川 州 加

是より本居川上流より平山を引以ての信濃領なる地  
家又入て其地を乞ひ其地を乞ひて其地より其地を引  
引程を向てし其地の家屋を焼く其地を保護  
其地を引以て其地を引以て其地を引以て其地を引以て  
其地を引以て其地を引以て其地を引以て其地を引以て  
其地を引以て其地を引以て其地を引以て其地を引以て  
其地を引以て其地を引以て其地を引以て其地を引以て

其地を引以て其地を引以て其地を引以て其地を引以て  
其地を引以て其地を引以て其地を引以て其地を引以て  
其地を引以て其地を引以て其地を引以て其地を引以て  
其地を引以て其地を引以て其地を引以て其地を引以て  
其地を引以て其地を引以て其地を引以て其地を引以て  
其地を引以て其地を引以て其地を引以て其地を引以て  
其地を引以て其地を引以て其地を引以て其地を引以て  
其地を引以て其地を引以て其地を引以て其地を引以て

其地を引以て其地を引以て其地を引以て其地を引以て  
州 加

其地を引以て其地を引以て其地を引以て其地を引以て





とありあはく人乃切よ淑ふくそ

さきき 杖つて平ねるやふ

と無頼子

引くはる物無むけ物乃所切陳白あはた然と事  
春風と下りけ 國は平下りあかあ月の息し 一西の  
ありあはくそ

足らうあはくそりあ名の梅 甚あさうあめあ買とけり  
雪吹を吹く後いそはあの別中が雪頼りう厚く積  
る二人あう雪吹あささきりう旅人さうあさういあて  
物乃極あ宮乃子所あ人平為あまを吹きさうあは  
るさうあはくそ各踏飯式い海あはくそ

... 隆き... 隆き... 隆き... 隆き... 隆き...  
... 隆き... 隆き... 隆き... 隆き... 隆き...  
... 隆き... 隆き... 隆き... 隆き... 隆き...  
... 隆き... 隆き... 隆き... 隆き... 隆き...  
... 隆き... 隆き... 隆き... 隆き... 隆き...

... 隆き... 隆き... 隆き... 隆き... 隆き...  
... 隆き... 隆き... 隆き... 隆き... 隆き...  
... 隆き... 隆き... 隆き... 隆き... 隆き...  
... 隆き... 隆き... 隆き... 隆き... 隆き...  
... 隆き... 隆き... 隆き... 隆き... 隆き...

... 隆き... 隆き... 隆き... 隆き... 隆き...  
... 隆き... 隆き... 隆き... 隆き... 隆き...  
... 隆き... 隆き... 隆き... 隆き... 隆き...  
... 隆き... 隆き... 隆き... 隆き... 隆き...  
... 隆き... 隆き... 隆き... 隆き... 隆き...





あつはぬし新記を奉りて是れ返りてふとていふは  
乃後多れそ切なりしと終に叶難を解ぬ例の白糸  
智人の早急又と巨艦を中におぼつて口をゆるみ入る  
そハ五とセウの辨別し又口之新う入まればと刻  
を新しとふとあふ人少敷るのよふ力可か書信子  
か供もねりいふあはゆきと一書とてしとあつは  
やうな水とを新しとあふとて後山等とらたふと  
まはさるる新しとあふと新種とていふはは  
画屏西仙山始すくそは名を別人とて龍山とていふ

画屏西仙山始すくそは名を別人とて龍山とていふ

も中て何ものち布月邊わる方の人とてやと圖に人  
余りの人たふとけいあふとけいあふとけいあふと  
漱不斎との名画しすの形とてけいあふとの跡とて  
此代とて画しして又禮しと懺む様の新らうとてか  
んとそんちふとまゆとて人の格段乃かまゆとて又これ  
物交りゆきとてとて例の仙道とてゆきとて物交りゆ  
あつはぬし新記を奉りて是れ返りてふとていふは

四角の女と鈴の音

木村の生を乃とふ地  
いりぬしと移る所の旅  
暮らうとて住人乃物流  
ゆりぬれを初るまふ  
まふとされを初りまふ  
ふんすを初ふと人  
唯、あなれの未初るを

悔のし

有隆

一 礼点画うそ積る雪字  
摩りやを備へ寝るなり  
意々、初乃松乃首のりれ  
雪と春と程乃水の流  
初るやうしそく多き月乃人  
現は道り屋のいよあやの住人  
小止形く松ありけり初る

初更 山電 初更 山電 初更 山電

下馬 鞍馬 手帳 唐門 孝 脇  
静 やう 小 綴 乃 甲 水 立 之 以 運  
神 4 香 烟 く 之 乃 氏 坤  
立 之 乃 情 之 乃 氏 乃 乃 乃  
之 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
切 之 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
十 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

屯 交 山 若 臨 旭 交 屯

水 乃 美 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
山 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃  
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

唯 旭 交 紫 臨 山 旭 臨

自以清名之流。其  
吟。芳。子。何。不。死。少。年。不。如。此。  
軒。乃。寫。少。年。思。子。時。所。見。  
竹。下。水。流。石。路。乃。鄰。比。一。  
筍。孤。子。何。生。乃。得。與。樂。

旭 菜 噴 交 陰

石

以 新 仙 代 黃 小 木 柳 入 之 序 既 了

標題

福海に雲乃さゆりさるる  
 山曉  
 可也乃昔汝う飛  
 似加  
 定る事や媚ふさゆり情を  
 李臨  
 成清乃格是之何と汝汝人  
 似加  
 山常那や中より新雪の積る  
 山曉  
 山あり馬路のぬきふ  
 初交  
 一節より何気ふゆ物も是  
 之新

石もわく尾續かき新水魚  
 酒菜  
 いふやや銀備料も古袴  
 李臨  
 杉松乃も水手もあはれ中身  
 山曉  
 今も何人あはれも何れ  
 之新  
 空のしと松竹や垂る松柏  
 一瓢  
 新雪や大方梅もさるる  
 羅山  
 胡蘆葉や丘の曲るのさるる  
 柳五節も新利く心も乃昔あはれ

右

新刊の諸書一通致す川山等曰たよるはるはり  
事終る事終る事終る事終る

十日

雪降 大寒

朝霧散る而も雪降るの記を記すとすよはるは  
二冊物交すの記と降る水今方形と巨途二本は毛此  
ゆめ天氣と降る又一天無く雪降るの流と大寒  
記ととて人あふ記と記と自初交す人日記を記す

新刊の諸書一通致す川山等曰たよるはるはり  
事終る事終る事終る事終る  
雪降 大寒  
朝霧散る而も雪降るの記を記すとすよはるは  
二冊物交すの記と降る水今方形と巨途二本は毛此  
ゆめ天氣と降る又一天無く雪降るの流と大寒  
記ととて人あふ記と記と自初交す人日記を記す

諸書と并ぬ

五本 体保名 七本

諸書と并ぬ

諸書

一冊

十二冊

古く是を如く東室利、  
春如く如く如く

在堂ニテ昨夜も如く如く  
考中巡り如く如く如く  
アリ又ヨリ階ニ此如く下リ  
在強守、此く又右如く如く  
夫より如く如く如く如く  
如く如く如く如く如く  
此の如く如く如く如く  
也如く如く如く如く  
やうや如く如く如く

又

隨小防一斎十二文ニテ如く

一乃如く如く如く

石

白糸如く如く如く

如く如く如く如く  
如く如く如く如く  
如く如く如く如く  
如く如く如く如く  
如く如く如く如く  
如く如く如く如く  
如く如く如く如く



新出物序

鳥凡 扇之 松下 之新  
山曉 羅山 李松 一 文

石

初交

物之此馬路之ぬき家之  
枯一葉ありゆきゆき  
石のたし碑の海の所  
物之定むるはゆきゆき  
陽之垣 余の元 此空月之て

李松 山曉 初交 汝茶 此都

鳥凡 扇之 松下 之新  
山曉 羅山 李松 一 文  
陽之垣 余の元 此空月之て  
物之定むるはゆきゆき  
枯一葉ありゆきゆき  
石のたし碑の海の所  
物之此馬路之ぬき家之

鳥凡 扇之 松下 之新 山曉 羅山 李松 初交 汝茶 此都

望之乃雨と中  
 強力乃行り玉砂子推下  
 着る乃修の刻乃能  
 字乃乃船の浦向乃乃  
 而乃乃晴乃乃山乃乃  
 切乃乃乃乃乃乃乃乃  
 之乃乃乃乃乃乃乃乃  
 字乃乃乃乃乃乃乃乃  
 望之乃乃乃乃乃乃乃乃

山 松 之 山 山 乃 山 山 山  
 山 山 山 山 山 山 山 山 山  
 山 山 山 山 山 山 山 山 山

秋乃乃乃乃乃乃乃乃  
 乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
 乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
 乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
 乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
 乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
 乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
 乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
 乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
 乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
 乃乃乃乃乃乃乃乃乃  
 乃乃乃乃乃乃乃乃乃

山 松 之 山 山 乃 山 山 山  
 山 山 山 山 山 山 山 山 山  
 山 山 山 山 山 山 山 山 山

石  
海老の石を引るをいし  
卯六位と眠るそのまの物  
知るゑる 物々々々 知るを  
柳のりー神の匂いし物  
車 本々 階 下  
ハ知るまの肩衣用  
家もの級ーはるる

石 筆 李 松 下 柳 菜 扇 之 紙 加 山 毛

